て　五味さんの　逆転発想　現場にも

Keyword：逆転発想，ひろげる（発問・資料等），つくる

2007.3.7. 朝日

役に立たないもの作ろう

2007.3.7. 朝日

五味太郎さん

@世田谷区立東深沢小（東京）

左の記事は，2007年３月７日（水曜日）の朝日新聞の切り抜きです。

「オーサー・ビジット（作者と話そう！）」との連載企画であり，作家（絵本作家，写真家，詩人等々）が学校を訪れ児童生徒を対象に各々の個性を反映した授業を展開する企画です。いま（2013.２現在）なお継続されている好企画です。

さて，五味氏が子どもたちに提供した授業の題材名は「役に立たないものを作ろう」でした。導入段階で「今日は，全然役に立たないもの，バカバカしいもの，くだらないもの，誰にもほめられないものを作って。時間は３０分！」と宣言し３０分後には鑑賞会の実施という展開だったようです。その鑑賞会の場で五味氏は，「〈誰にも気づかれない絵〉か。成功だよ！みんな気づかずに踏んづけていたもん」「この作品のすごいところは，いかにもムダな時間を過ごしました，というところだな」と彼一流の子どもたちへのメッセージを発信しています。のみならず五味氏自身が「バカバカしさを測るメジャー（ボール紙を細長く切って，はり合わせてあった／記者の補説）」をつくり，それを子どもたちの作品にあてがい「ちょっと測ってみよう。このやたらと大きな絵は62バカバカシサだ。素晴らしいな！」などと子どもたちとの遣り取りを繰り広げたとのこと。そしてこの授業について五味氏は「使えないものを考えると，便利なものが見えてくる。ムダなものを作れば，必要なものが分かる。こんな風にくだらないことを積極的にやると，役立つもののことがよく分かる」とのコメントでこの授業を括ったようです。

この記事を担当した記者のおかげで再現ビデオさながらに授業の様子を私はイメージできました。まさに子どもたちはあれこれ感じ，考え，そしてかいたり，つくったり，お互いの作品を見合ったりと活動を楽しみながら五感覚総動員，脳はフル稼働，子どもたちの美術力，人間力の錬磨は容易に想定できます。「役に立たないものを作る」としたこの題材，実は子どもたちには限りなく「役に立つ題材」だったと思われます。マニュアル化された指導法〈く（Page44）〉〈や（Page45）〉が節度なく全国の学校に蔓延している状況をみるにつけ“かけばいい　それもちがうよ　だめですよ”，“みればいい　やっぱりちがう　だめですよ”。と言わざるをえない実態の対極にある事例と考え引用しました。

我が学生諸君，レッジョ・エミリア市の５歳児になりき“ライオンの肖像（立体／平面）”にチャレンジ。無論，材料・用具は５歳児が扱えるもののみという限定付きでした。そんな制限の中でどんなアイデアが…